

重度知的能力障害者 2 症例の音楽療法活動における記憶の検討

○山下貴子
（目白発達心理研究所）

岡本光
（目白発達心理研究所）
KEY WORDS: 記憶 音楽療法 重度知的能力障害

五十嵐一枝
（白百合女子大学発達臨床センター）

（目的）

植田は、知的能力障害者の加齢変化の特徴として、40 歳代を節目に身体機能の低下や認知症に罹るリスクが高く、認知症の発症が早い傾向があるとしている。筆者らは、人は人生を閉じる時まで、生涯を通して意識や行動が変容し続けるという生涯発達の考えの基に、学校教育が終了し就労をしてからも療育が必要であるという考えを施設と共有し、現在作業所に通う 10 代から 40 代後半の重度知的能力障害者に長期にわたりグループ音楽療法活動を定期的に行っている。また、メンバーに 3 年に一度実施する知能検査において知能指数が下がることがないことに注目をし、本研究では、重度知的能力障害者の特に記憶について、音楽療法活動プログラムを設定し、それに沿って記憶の検討を行った。

（対象）

症例 A	42 歳	女性	IQ 30（田中ビネー V）	2018 年実施
診断名	知的能力障害			
音楽歴	ピアノ歴 32 年	グループ音楽療法歴 22 年		
主訴と療育目標	身体への過緊張の軽減 不安感情の軽減			
症例 B	45 歳	女性	IQ 38（田中ビネー V）	2018 年実施
診断名	自閉スペクトラム症＋知的能力障害			
音楽歴	無	グループ音楽療法歴 15 年		
主訴と療育目標	語彙を増やす 歌唱力を伸ばす			

（方法）

202X 年 X 月～202X 年 X+4 月、1 ヶ月に 1 回 60 分の記憶に特化した音楽療法セッションを 4 回行った。セッションは、クライアント 2 名～3 名のグループに分け、セラピスト 1 名アシスタント 1 名で実施した。また、以下の通りプログラムに沿って口答、目視とビデオ映像で記憶の計測を行なった。

1. ウォーミング・アップ：セラピストが行う動作を覚え音楽に合わせて模倣が正確にできるか否か計測をした。
2. 曲名をあてるクイズ：演奏を聴取させ、季節の歌や歌唱や合奏で取り上げた曲名を明記させ、計測をした。
3. 挨拶：名前、電話番号、住所を質問形式で答えさせ正確にいえるか否かを計測した。
4. 合奏：楽譜にそってタイミングよく順番を間違えずにトーンチャイムを正しく演奏できるか否か計測を行った。
5. 算数クイズ：デスクベルを鳴らした回数を口頭で答えさせた。
6. 反省会：当日実施したプログラムの中で頑張ったことが、いえるか否か計測をした。

（結果）

症例 A は、プログラム 1 の課題では、動作の順番を覚えることが難しかったため、音楽を聴いて合わせる余裕も持てず「難しい。」と言いながら、最後の手拍子だけができていた。

プログラム 2 の曲名をあてるクイズは、全問正答であった。また、作曲者名もよく覚えていて書くことができた。プログラム 3 の挨拶は、名前、住所、電話番号は、正確にはっきり文章で答えられた。プログラム 4 の合奏では、援助の合図をしないと自分の番を忘れ、遅れてしまい正確にはできなかった。プログラム 5 の算数クイズでは、デスクベルの音の回数を 7 まではすべて正答であった。それ以上は、難しかった。プログラム 6 の反省会では、がんばった事をプログラムを見ずにはっきりと答えることができた。症例 B は、プログラム 1 の課題で足と手の位置が一度左右逆になったが、それ以外は音楽にあわせて正しく覚え模倣ができていた。プログラム 2 の曲名をあてるクイズは、全問正答であった。プログラム 3 の挨拶は、質問に対して名前、住所、電話番号を正確にはっきりと答えられた。プログラム 4 の合奏では、楽譜を見ずに自分の番になるとトーンチャイムを鳴らすことができた。プログラム 5 の算数クイズでは、デスクベルの回数を 10 まで正答が言え、間違えると涙を流した。プログラム 6 の反省会では、頑張った課題を文章にしている時に最後の動詞を過去形と現在形の言い間違いをした。

（考察）

症例 A の知能検査では、2 歳級から 8 歳級まで正答にばらつきがあり、意味が同じでも正確な復唱が難しく、意味のある文作りの助詞の使い方が困難であった。数唱でも 4 桁順唱ができるが、逆唱は理解ができなかった。そのため音楽療法課題でも視覚記憶と聴覚記憶を同時に必要とする課題が難しかった。しかし音楽歴の長さから曲名や作曲者をよく覚えて知っており、長期記憶から自ら再生する力があつた。症例 B の知能検査では、3 歳級から 8 歳級まで特に視覚的記憶を用いる検査や数唱と逆唱ができていた。自閉症スペクトラム症の特徴が音楽療法課題の記憶計測でも同様であった。特にプログラム 1 のような音楽に合わせた動作模倣は得意であり、音楽活動で同時に異なる事を行う課題は、症例 B にとって容易であると思われた。知能検査から文章の復唱や短文づくりは難しいが、演奏を聴いて正しい曲名が明記でき、それに合わせて歌詞もスムーズに言え、楽譜のメロディーを覚える事も容易であった。トーンチャイムの順番もよく覚えていて注意集中の持続を求められる課題もよくできていた。グループ音楽療法活動では、3 年に一度知能検査を実施しているが、知能指数が下がることがない。今回の記憶課題に特化した音楽療法活動は、生涯発達の観点からも長期の療育の意義があり、またこれから加齢とともに身体や脳、特に認知症のリスクが高いとされている重度知的能力障害者にとっては、定期的に音楽療法活動を継続することは、彼らにとってリスク回避の手段として大きな意味があると思われる。

（本研究にあたり、症例にあげた 2 名の女性の保護者と女性、2 名が所属する施設長より承諾を得た。また、利益相反も無いことを明記する。）

（YAMASHITA Takako, OKAMOTO Hikaru, Igarashi Kazue）